

特集

ニトリが5000万

# 「小樽オタモイ復活の夢プ

円寄付!

# 遊園地」ラン



◀急峻な断崖に建つ龍宮閣 (小樽市総合博物館所蔵)

小樽観光に新たな目玉が誕生するかもしれない。小樽商工会議所が、景勝地として知られるオタモイ岬の「オタモイ遊園地」跡地に大規模な観光施設を建設する構想を打ち出し、多方面から注目を集めている。発案者は、オタモイ岬に強い思い入れを持つ、ニトリホールディングスの似鳥

昭雄会長。計画自体はまだ青写真の段階にさえ至っていないものの、「調査費」として5千万円をポンと寄付した似鳥氏という強力な援軍を得て、コロナ禍に希望を与えてくれる夢のビッグプロジェクトは具体化に向けて動き出す。  
(フリーライター・内海 達志)

## 断崖絶壁に建つ夢の楽園

まずはかつてオタモイ岬に存在した「オタモイ遊園地」について説明しておこう。

高級料亭の龍宮閣を中核に、演芸場、白蛇弁天閣、弁天食堂、海水浴場などから成る一大レジャー施設で、断崖絶壁に張り付くように建つ龍宮閣の圧巻のロケーションは、他に例をみないものであった。建設資材などは海上から運び上げたとい

うから、想像を絶する難工事だったに違いない。

これを手掛けたのは、愛知県出身の加藤秋太郎。1908(明治41)年に来樽した加藤は、花園町の「蛇の目寿し」の成功で財を成し、巨額の私財を投じて1934(昭和9)年に完成させた。加藤がこれほどに情熱を傾けたのは、当時の小樽が「自然の名所に乏し

く、宿泊するだけの魅力がない」と評されていたことへの反発があったとされる。

加藤の目論見通り、「オタモイ遊園地」は大人気を博したが、開園後は相次いで不運に見舞われた。豪雪や地滑りといった自然災害による施設の損壊に加え、戦局の悪化に伴う不況が経営を圧迫する。経営権を譲渡した加藤は、失意のうちに小樽を去り、1952(昭和27)年、龍宮閣は全焼という悲劇的な結末を迎えたのだった。

20年にも満たない短い歴史ではあったが、そのぶん「オタモイ遊園地」の記憶は人々の脳裏に深く刻まれているようだ。焼失後は3度の再開発計画が浮上

したものの、いずれも実現には至っていない。跡地を含む海岸は、1963(昭和38)年にニセコ積丹小樽海岸

国定公園に指定。1978(昭和53)年に小樽市の所有地となっている。

## 似鳥会長の発言が発端に

今後の構想について、小樽商工会議所の山崎範夫専務理事と笹原馨・業務課プロジェクト

ト担当課長は、次のように言う。

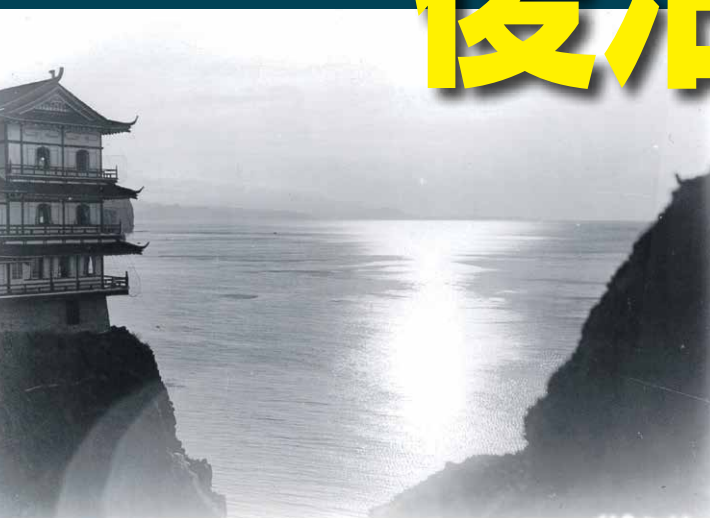
山崎氏は、「計画の概要とまでは

いっていない」と、前置きしたうえで、こう経緯を話す。

「一昨年、似鳥昭雄会長と迫俊哉市長、山本秀明会頭が会った際、似鳥会長が『昔、目にしたオタモイの景色が印象に残っている。あそこは素晴らしいから、今でもお客さんを連れて行く』とおっしゃ

やって、市長に『開発を頼むよ』と。そのときは軽い感じの話ではあったのですが、市長から『市では手を付けにくいので、民間で何とかありませんか』と会頭に打診があり、『では、ひとつやってみようか』となったわけですよ」

そこで同会議所は、昨年6月に勉強会をスタート。現地視察を行い、過去の資料を調べるなどして、「安全確保の面から、同じ場所に龍宮閣を再現するのは難しいが、オタモイ岬の駐車場に施設を建てるならば可能」との見解をまとめた。会議所の職員は、この素案を叩き台に「これからゆっくり進めていこう」と思っていたのだ



▲日本海を一望する絶好のロケーションだった小樽市総合博物館所蔵



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を  
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから  
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

**TEL 011-644-0101**

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)